5 官位をおとししりぞけられること、塵芥よりも軽くあしらわれ
6 京から追い払われること　弓から矢が放たれるかのようにせかされた。
7 （その事態の当事者である私は）恥ずかしさで赤面し、それが高じて、顔面がいよいよ厚くなる。
8 （その事態に遭遇して）あわてふためき追放される様は、踵を向きかえる時間もないほどであった。
9 （太宰府へ放逐されて行く道々での）牛のひずめの跡のわずかな水たまりさえも私には（大きな）落とし穴のように思え
10 （太宰府へ放逐されて行く）鳥の飛ぶ道には、（いつも）鷹やはやぶさが待ち構えているように思えた。

【二段】

11 老僕は、その長い道すがら、いつも杖に助けられ、私につき従った。
12 （余りの道程の長さに）疲れ切った馬を進ませるのに、何度も何度も鞭をあててきた。
13 京からの別れ道に立っては、腸がちぎれるほどの筆舌に尽くし難い悲しみを味わって来た。
14 遠く京都の宮城をあとにし、（これが見納めになるのでは、と）目が穿つほど、その情景を凝視したものだ。
15 別れに及んで流す涙は、着物に落ちた朝露と見違うばかり。
16 （別れに及んで）泣く声は、（哀切悲愴な泣き声で知られている）杜鵑のそれをかき乱すほどのものであった。
17 （追放されて行く道中の）街道は風に砂塵が舞って、雲が立ち込めたように四方は煙っていた。
18 （追放されて行く道々の）野原には（春光を浴びて）草があたり一面に生い繁っていた。
19 （道中の）駅舎では新たにあてがわれる馬とてなく（今まで乗り続けてきた）蹄を傷め、疲れ果てた馬